

〈修士論文要旨〉

グループ発達の可能性について

— Bionの集団理論に基づく実証的研究 —

岩 崎 和 美*

I 問題と目的

本研究は、グループの発達過程に関する実証的研究である。人は集団に属しながら、生きていかざるべき存在である。そして、個人の発達同様に、集団もまた、決まった発達過程をたどると考えられている。それに従って、グループ発達について幾つかの理論やモデルが提唱されてきた。Winter (1976)、Agazarian (1997, 1999)、Bennis & Shepard (1956)などのモデルが有名なモデルとして挙げられるが、本研究と最も関係のあるモデルはBennis & Shepardのモデルである。

Bennis & Shepardは、グループの発達過程を二つの位相と六つの下位位相で説明しようとした。そして、二つの位相はそれぞれ三つの下位位相によって構成されている。第一下位位相は、依存的かつ反依存的というグループ行動の二つの異なる種類によって特徴付けられる依存—逃避である。第二下位位相はリーダー（トレーナー、セラピスト）に対する敵意とグループ内の不和によって特徴付けられる、反依存—闘争である。第三下位位相は解決—カタルシスとして言及されている。この位相でのポイントを挙げるとするならば、グループにおいて最も顕著な力は破壊的な力であるということである。そして、権威への没頭が第一位相における中心のテーマであったが、第二位相では、相互依存と愛情の分配がグループの基本的な問題となる。このモデルにおいて注目すべきことは、この進展はいつでも成し遂げられているわけではないということである。既述したように、Bennis & Shepardは、本研究の最も中心的なモデルである。なぜならば、Bion (1961)の集団理論を基にこのモデルを提唱しているためである。

Bionによってなされたグループに関する最も基本的な発見は、あらゆるグループには同時に存在する「作動グループ (work group, 以下WG)」と「基本的想定グループ (basic assumption group, 以下baG)」という2つの対照的な機能的水準が存在するということである。WGは、グループのメンバーが自ら「協同 (cooperation)」し、作業に不可欠な知識、訓練、経験、技能をもち、科学的な方法を用いて「基本的作業 (basic task)」に没頭しているグループを形容するような心的活動である。WGは作業による欲求不満に対する耐性、「経験から学ぶこと (learning from experience)」、時間の流れと発達を意識したり、重視したりすることによって特徴づけられる。しかし、WGは、グループの存続や発達のために不可欠なのだが、苦痛を伴うので、グループはそれを回避しようとする。その際に、グループはWGと共存する、無意識的、衝動的、幻想に基づくもう一つの心的活動、すなわち「基底想定グループ (basic assumption Group, 以

平成21年度 *社会学研究科社会学専攻 (臨床心理学コース)

下baG)」に頼る。その結果、baGはWGを阻止し、両グループ心的側面の間の力関係、すなわち「勝った方がグループを支配する」という関係が成立する。さらに、baGには、3つの異なった類型がある。「依存基底的理想グループ (basic assumption of dependency, baD)」、「闘争/逃避基底的理想グループ (basic assumption of fight/flight, baF/Fl)」、「つがい基底的理想グループ (basic assumption of pairing, baP)」の3つである。すべてのbaGは一定の「基底的理想」に基づいており、経験から学ぶ能力の欠如、時間と発達に関する無関心という、WGとは異なった特徴も持っている。まず、baDにおけるグループの共通幻想は、グループが未熟で、他者の援助や指示がなければ何もできない、そして他者（例えばリーダー）が全知、全能であると信じていることである。特徴として挙げられるのは、グループの雰囲気は無気力、不活発であり、メンバーは精神的に未熟であるかのように振舞う。そして、グループは教祖的リーダーシップを求め、縦的、また横的な関係の両方において依存する傾向が見られる。次に、baF/baFlグループの共通幻想は、グループの存続にとって脅威と感じられる何らかのもの（敵）が存在していると信じていることである。そのため、baF/baFlの下で機能しているグループは、その敵と戦ったり、そのものから逃げたりするために集まったかのように振る舞う。したがって、敵を前に戦うにせよ逃げるにせよグループには行動（行動化）が不可欠である。baPグループの共通幻想は、単なるつがいの存在だけではなく、その存在によって導かれる幻想であり、「グループの存続と維持がこれから生まれてくるであろうリーダー（救世主）による」もの、そしてその救世主を期待することである。つがい（サブグループ）がグループの中心であり、目標としての希望と期待をグループは抱いている。さらに、未来性思考が特徴として挙げられる。これは、WGとは違った意味での未来性であり、現実に基づいていないことが特徴である。そして、このbaPに支配されているグループは、成員間が親密である。そして、平等と正義感が重視される。3つのタイプのbaGがあり、その一つが常にWGと共にグループには存在しているとBionは考えた。baGとWGとのいくつかに分類された関係によって、グループ心性に大きな影響を及ぼし、グループメンバーへも無意識的な影響を与えている。以上に述べたBionによる集団理論に基づいて研究を行う。

そして、本研究で用いているグループ概念はBennis&Shepardのグループとは異なり、Hafsi (1990) によるD-グループである。D-グループの根源はAnzieu (1984) とその同僚らによる「groupe de diagnostic」あるいは「診断グループ」である短期精神分析思考のT-グループにある。D-グループは、「二次過程」だけではなく、「一次過程」も取り扱っていくという点でT-グループとは異なっており、解釈の意味からグループ内の力動的な変化と、グループの「今・ここ」(here-and-now) における隠れた意味をも同時に把握することを認める点にある (Anzieu, 1984)。グループ構成は（原則としてはお互い見知らぬ）8～16名のメンバーと1名のトレーナー（以下、Tr）、2名の観察者からなる。セッションは、平均して5～20のセッション（1回80分）を行うクローズグループであり、参加者のカテゴリー（学生、専門家等）とニーズにより、3日から2週間にわたって行われる短期的グループである。参加者の性別に関して、D-グループは男性と女性の人数がほぼ同数であることが望ましいとされている。多くのグループ方法と同様に、メンバーは、Trを含めて、円になって座り、2人の観察者はグループの外で座る。D-グループでは、初回にTrによって告げられる二つの基本的な「規則」がある。すなわち、「復元規

則」と、「禁制原則」である。「復元規則」では、今・ここで言いたいこと、感じたことを「自由に」表現でき、また他の参加者のそれに耳を傾けることが求められる。「禁制規則」は、個人精神分析と同様に、Trも、観察者も、グループメンバーとは、一切私的関係をもってはいけないということを主張する規則である。つまり、Trは、グループとのセッション外での接触を避け、セッションにおいても、Trは今・ここにおけるグループに関する以外に参加しない。次に、D-グループの目的は、集団心理学に対する、特に経験的な知識を提供することによって、心理学的現象に対する参加者の理解を深めること、また、鋭敏化を目指すことである。

既述したように、グループに関する研究は様々に行われており、グループ発達に関しても様々な理論やモデル、概念が提唱されている。しかし、既述したグループ発達過程モデルに共通していることは、グループの発達過程は「直線的で固定されたものである」という点である。しかし、Bionの集団理論に基づくと、集団は直線的な発達を遂げるとは明記されていない。以上のことから、直線的な固定された段階をグループは本当に歩むのだろうかという疑問を持った。本研究ではBionの集団理論の観点から、D-グループを観察し、回収したデータを用いて、対象のグループの発達過程を明らかにする。そして、グループ間の質的・量的な違いを明らかにし、グループは直線的な発達を遂げるのかを検証することが本研究の目的である。そのため、「グループは直線的な発達を必ずしも遂げないであろう」という仮説を立て検証する。本研究は二つの研究から成り立っている。

Ⅱ 方法【第一研究】

以上の仮説を検証するために、第一研究では以下の方法を用いた。

対象は、心理学系の大学に通う学生273名（男性：156名、女性：117名）によって構成されたD-グループの22グループである。8名～14名のメンバーとトレーナー1人、オブザーバー2名で行い、各グループ6セッションのセッションを行った。大学の講義の一環で行われたD-グループで、集団力動の体験的な学習を目的に行われた。連続した2コマの講義時間を使用し、2セッションずつ行い、3週間で6セッションを行った。6セッションはまとめのセッション、ディブリーフィングを行った。

本研究で使用した尺度は、基底的想定尺度である。基底的想定尺度は、セッションのグループ心性を測定するための尺度で、全37項目から構成されている5件法の質問紙である。本尺度を、各セッション終了後に配布し、その場で実施、回収した。

Ⅲ 結果【第一研究】

まず、基底的想定尺度の信頼性分析を行ったところ、Cronbach Alpha = .888という結果が得られたため、本尺度の信頼性は確認された。次に、基底的想定尺度の因子分析を行ったところ、5つの因子が抽出された。結果から、第一因子を「Cooperation」因子、第二因子を「Fight」因子、第三因子を「Pairing」因子、第四因子を「Dependency」因子、第五因子を「Flight」因子

と名付けた。次に、各グループの発達過程をグラフによって明らかにした。因子得点を算出し、全グループのセッションごとの基底的想定得点の平均値によって、グループの発達過程を明らかにしようとした。その結果、直線的な発達を見せるグループは見られず、グループごとの発達過程に違いが見られた。

IV 方法【第二研究】

第二研究では、一つのグループを取り上げ、セッション中の発言内容の分析を行い、グループの発達過程を明らかにし、さらに、基底的想定尺度と共に実施したソシオメトリック尺度を用いて、ソシオメトリーを作成し、メンバーの関係からの発達過程を明らかにしようとした。使用した尺度は、ソシオメトリック尺度である。ソシオメトリック尺度は、グループメンバーの関係を測定する尺度であり、17項目から構成されているアンケート形式の尺度である。本尺度を使用し、セッションごとのソシオメトリーの作成、分析を行った。次に、セッション中の発言内容の分析を行った。本分析は、黒崎（1998）によって作成された「Insider Scale」に沿って評定を行った。観察者によって逐語されたセッション中の発言内容を基底的想定に評定し、各セッションでどれだけ各基底的想定の発言が占めているのかをパーセンテージでグラフに示した。

V 結果【第二研究】

ソシオメトリーの分析を行ったところ、Dislike値は第二セッションにおいて減少したが、第三セッションから再び増加する結果が得られた。Like値に関しては、全五セッションを通して、大きな変化は見られなかった。次に、各セッション中の発言内容を評定し、グラフによって明らかにした。その結果、各基底的想定、作動グループ、トレーナーの発言は、セッションごとに発達を見せることはなかった。例えば、依存基底的想定の発言パーセンテージにおいて、第二セッションは大きく増加するが、第三セッション、第四セッションでは、減少する。しかし、第五セッションにおいて、再び増加する結果となった。次に、闘争基底的想定の発言パーセンテージは、第二セッションから増加する傾向が見られたが、第五セッションでは減少している。以上の結果から、モデルのような直線的な発達は見られなかった。

VI 考 察

本研究では、二つの研究を通して、対象のグループの発達過程を明らかにした。その結果、Bennis & Shepard (1956) のモデルは、本研究で対象となったグループの発達過程の結果において支持されなかった。そして、グループの発達過程は、必ずしも固定的な直線的な発達をたどるものではなく、グループごとに様々な発達過程が存在することが示唆された。そのことから、「グループは必ずしも直線的な発達をたどるものではないであろう」という本研究の仮説は実証された。そして、二つの研究を通して、グループは必ずしも直線的な発達過程をたどるものでは

なく、「基底的思想が循環的に入れ替わり、発達していくものではないだろうか」という新たな仮説が示唆された。

既述したBion (1961) の理論では、グループは様々な基底的思想を循環的に繰り返しながら作動グループになったりしながら、発達をしていくことが示唆されている。本研究を通して、グループの発達過程はグループによって異なり、さまざまな発達過程をたどるであろうことが示唆された。また、既述したBennis & Shepardのモデルでは、グループの発達はどのような状態で達成されるのか、また、発達が達成されたグループのその後はどうなるのかという点について示されていなかった。本研究では、グループの発達は作動グループになることがグループ発達の達成であると定義し、検証した。しかし、本研究の結果から、作動グループを示したグループは少なかった。このことから、作動グループの難しさが示されていると考えられる。このことから、グループ発達の達成の定義を明らかにすることが、今後の研究の根本的な課題であると考えている。それを明らかにすることができない限り、グループの発達過程のモデルを示すことができないと考えているからである。

今後の研究では、グループの発達過程をさらに明らかにし、グループの発達とは何かを明らかにすること、グループ発達過程を明らかにすることを課題としたい。